暗躍語―アンヤクガタリ―

鈴本暁生

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ』に転生した主人公が、ギルド《妖精の尻尾（フェアリーテイル）》に加入して物語（シナリオ）の裏側で暗躍する。

「例（たと）え泥（どろ）に塗（まみ）れようと、なお前（まえ）へ進（すす）む者（もの）であれ」

全ては、彼が望み思い描く最善の未来の為に……。

目次

Episode.1 ―――――――――――――― 1

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１

『フィオーレ王国』、人口約１７００万人の永世中立国。
この世界（アースランド）には魔力が溢れ、当たり前の様に魔法が『魔法道具（マジックアイテム）』などの形に変化して売り買いされている。魔法を使用する事を生業とする者「魔導士（まどうし）」が存在し、世界の人口の一割がそれに属している。

フィオーレ王国が属する大陸に幾多も存在する「魔導士ギルド」、そこは魔導士達に仕事の仲介などをする組合組織である。

妖精の尻尾（フェアリー・テイル）。

フィオーレ王国東方の街・マグノリアに本拠地を置く魔導士ギルドの一つ。聖天大魔道の一人たる三代目マスター”マカロフ・ドレアー”を始めに有力な人材を多く抱え込んでおり、「フィオーレ王国最強のギルド」と評されている。

その一方、個性的なメンバーにより次々と問題を起こす為「フィオーレ王国一の問題ギルド」として魔法評議院からは目を付けられている。炎を纏う滅竜魔導士（ハカイマ）、空を飛び人語を話す毒舌猫（エクシード）、露出癖のある造形魔導士（残メン）、鬼神の如き強さを誇る最恐女剣士（ティターニア）……　などなどいくら説明してもきりがないほどの濃い面子の多いこの《妖精の尻尾》は、ギルド全体の仲間意識は非常に高く、ギルドマスターを始めとしたメンバーは皆「家族」の様な強い絆で結ばれている。

そんな問題児を抱える、「大陸最強」にして「はた迷惑＆お騒がせＮｏ．１」の称号を堂々と獲得する《妖精の尻尾》に、新しいメンバーが加わった。立派な星霊魔導士になる為に《妖精の尻尾》に加入した少女・ルーシィ。彼女はギルド内でも問題児扱いされている「火の滅竜魔導士（サラマンダー）」ナツによって連れて来られた。

――――――――――――本来の物語（シナリオ）ならば、そこで始まるのだった。

……　しかし一年前になるが、ギルド創設後以来の最年少魔導士が加入していた。

その魔導士は、逸脱した戦闘力を持つ自覚がある故に孤立していた。

その魔導士は、11歳と言う若さで成人魔導士ランクのクエスト数件を同時に終わらせた。

その魔導士は、評判を聞きつけた魔法評議院会の枢機卿（すうききょう）からの直接指名で高難度クエストや討伐などの依頼を受けるようになり、ギルドに戻ることは殆どなくなった。

その魔導士は、討伐依頼を受けて数か月前ほどマグノリアを出ていたのだが……　今、戻ってきていた。

◇　◇　◇

評議院の建造物に存在する、とある評議員の執務室。

権力を象徴する華美なつくりではなく、質素なつくりをしており、必要最低限の道具などしか置かれていない。壁側にズラリと並べられている本棚は一見普通の本棚に変わりないが、そこに収納されている書物はどれも一級品の魔導書だったり機密文書だったりすることは一部の人間しか理解できないだろう。

その執務室の主、グレル・ゲーテル枢機卿は依頼した魔導士の報告を受けていた。

「報告は以上です、ゲーテル枢機卿」
「そうですか。急な討伐任務ご苦労、セレネ・ヴァデンバーク」

依頼を受けた魔導士、セレネ・ヴァデンバークはグレルの労いを愛想笑いをするだけで流した。このクダリは指名を受けて以来、何回も経験しているため恒例化されている。
グレルは音声(ほうこく)を記録したラクリマを後ろに控える部下に手渡す。受け取った部下はそのまま執務室を退室したのを見送ると、グレルはセレネを接待用のソファに座らせる。

「最近買った紅茶なんですが、一緒にどうでしょう?」
「貴方が選んだ紅茶はどれも美味しいのでありがたく戴きます……何か、不備な点でも見つかりましたか?」

一人でに浮かぶポットとティーカップを横目に、セレネはグレルに聞いた。この部屋で盗聴される失態は有り得ないだろうが、念の為遠まわしに確認を取るとグレルは首を振った。

「いいえ、何時も通り不備一つない報告でとても有難いと賞賛したいくらいです。本来なら成人済みの魔導士に依頼したかったんですけど……君の様な逸材の魔導士が中々見かけないのが悩みの種になっていることぐらいですよ」
「そんなに逸材ってほどじゃないんですけど……強いて言うなら弟子は師の背中を見て育つものです。偶々自分の師匠となってくれた人物が規格外だっただけですよ」
「成程、『規格外』ですか……今まで闇ギルドを半日で壊滅させた君に『規格外』呼ばわりされる師匠さんと、是非とも一度話してみたいものだ」

ククッ、と愉快そうに笑いながらズレたメガネを指で戻すグレルの指摘に、セレネは気にも止めず淹れ立ての紅茶を啜る。グレルの述べた

ことは事実なので否定しようがない。セレネ自身も否定したところで彼の前では意味はないと理解している。その為セレネは否定もせず無言で紅茶を飲んだ。
　無言を自己判断したグレルは、「では・・・」と姿勢を改めた。彼の合図に気付いたセレネは、紅茶の入ったカップを静かにテーブルに戻した。

「フィオーレ王国北東に位置する、オークと言う街はご存知ですね」
「ええ・・・・・・ 良く知っています。此処に戻ってくる前に少し寄りました」

　話す内容を察したセレネは返事を返した。

「二週間前のことです。ジュード・ハートフィリアがクエストを依頼し、正式に受理されました」
「それは、随分と思い切ったことを・・・・・」
「まぁ、クエスト内容を理由に近々宣戦布告するでしょう」

　その後については考えていないのか、と呆れるグレルに対して反論する要素が無い。セレネは無謀な抗争を仕掛けようとするギルドに合掌した。ちなみに彼らに同情はしなていない。あそこのマスターは個人的に社会的地位を抹殺されればいいのに、と密かに祈る程度の認識である。
　元々幽鬼（ファントムロード）の支配者と妖精（フェアリーテイル）の尻尾は戦力は均衡しており、昔から仲が悪く対立していた。・・・・・「最強」の名に酔いしれたいと、執着するマスター・ジョゼの私欲も含まれているが。
　評議院側としては見過ごせない案件だ。ジョゼの起こそうとしているのはギルド間抗争禁止条約（かんこうそうきんしじょうやく）に触れ、最悪ギルドの解散命令は免れない。そうなれば、イシュガル大陸の西側に位置するアルバレス帝国に対抗する戦力を自分たちで削ぎ落とすと同意義なのだ。
・・・・・ だが、グレルはあえて言った。

「この際ですから、あそこには潰れてもらいましょう」
「……　よろしいので？」
「ええ、今までギリギリ規定に触れないだけであって正規ギルドの汚点に変わりありませんしね」
「……　枢機卿、ストレス溜まっていますか？」

質問を微笑みで返すグレルの紳士的行動に、セレネは「失礼しました」と素直に謝罪した。これ以上刺激するのは不味いと本能が叫んだのだ。しかし、グレルはセレネの謝罪を流して言葉を続けた。

「ギルドとしては貴重な人材は点々と存在しますよ？特にエレメントフォーや黒鉄はフィオーレに残ってもらわなければ困りますけど……　魔導士ならば、魔法の用途を誤ればどうなるかなど理解できない年頃ではないでしょう。

だというのに、くだらない私欲に周囲の人間を巻き込むなど愚者（おろかもの）と言わず何と言いますか？」

ただ、彼は語っているだけだ。
話しているだけだ。
彼と会話しているだけなのだ。

「貴方らしいですね。ゲーテル枢機卿」

……　だが、同時に伝わるプレッシャーに冷酷さを覚えず、無情な覚悟にしか感じなかった。国の動かす政治に関わっていただけあって、その言葉の重みはリアルに伝わってくる。

彼にとってギルドは、等しく防衛(戦カ)の手段であり、等しく切り札(ジョーカー)であり、等しく生活を発展させる存在を生み出す方法(道具)としか思っていない。そこに年齢の差別はなく、才能ある者は全て受け入れるのは彼の長所である。

だから、セレネの様な年齢の魔導士でも平然と言える。

「セレネ君、支部の方を頼みますね？」

「掃除(処分)ですか？」

「掃除(処分)と清掃(壊滅)は規模が違うだけであって、意味合い的には合っているんですよ。今回は清掃(壊滅)でお願いします」

まるで「ちょっとそこまで御遣い行って来て」と軽い口調で依頼する。しかしその内容は「やるなら徹底的に叩け」という無情な指示である。

彼は才能があれば年齢関係なく引き抜くが、同時に才能が無ければ切り捨てる合理的な実力主義者だ。一回り二回り年下の少年に、「逸脱した才能を持っている」と言うことを理由に、幽鬼の支配者(ファントムロード)の各支部の処分・壊滅を躊躇なく依頼するのは、大陸探しても彼ぐらいだろう。

「……　準備が出来次第、出発します」

「タイミングはこちらの方で伝えますので、その間は身体を休ませるなりしていても構いませんよ。通信用ラクリマ持っていますよね」

「はい。分かりました」

これは、無限の可能性を秘めた魔法と各々の思惑が跋扈する世界に転生した少年によって紡がれるバトルアクション成長物語。

「そうそう。先日、《妖精の尻尾（フェアリーテイル）》宛に請求書がまた来たんですが……」
「……」
「何時もの様に報酬金から差し引いても問題ありませんか？」
「……　大丈夫です」
「君とマスター・マカロフの御足労、心中お察ししますよ」

―である……　多分。